



Title	女性の《Parole》の考察 : スタンダード「赤と黒」を中心に
Author(s)	赤木, 富美子
Citation	études françaises. 1983, 19, p. 25-43
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93662
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

女性の《Parole》の考察

—スタンダール「赤と黒」を中心に—

赤木 富美子

はじめに

小説における会話表現の問題を、続けて検討してきて、先回は、Flaubertの *L'Education sentimentale* をとりあげた⁽¹⁾。その際、技法上のさまざまな会話形式の変化が、いかに意識的に、かつ有効に駆使されているか、に注目したが、特に女主人公たちの直接話法の用い方のなかには、単に技法上の理由でなく、はからずも当時の女性のおかれた地位を反映していると考えられるものを垣間見ることができた。この点は、もっと発展させ *mme Bovary* などを中心にとりあげたい問題であったが、先回のテーマは技法を主にしていたので、簡単な指摘にとどめざるを得なかった。

今回、Stendhal の小説における会話表現を論じるに当っては、次のような観点から、アプローチを試みたい。すなわち、今度は逆に、先回付随的発見であった女主人公の会話の検討から始めて、これら作中人物とその話法との密接な関係を確認（社会学的観点）した後、この小説における会話の機能（技術的観点）と、会話についての一般的考察（会話論的観点）とを、並行させながら検討してゆく。しかしこの部分も、女主人公を手がかりにする以上、女性の「ことば」⁽²⁾に中心がおかれることは、言うまでもない。

第1章 直接話法部分の人物表現

- 1 社会的制約と会話
- 2 性格と会話

3 恋愛と会話

第2章 会話の機能

- 1 否定的要素（会話への一般的不信と技法上の不信）
- 2 肯定的要素（直接話法の効用）

テキストは、

Le Rouge et le Noir, p. p. H. Martineau (*Classiques Garnier*, 1965)

を使用し、その他

La Chartreuse de Parme, p. p. A. Adam (*ibid.*, 1973)

Vie de Henry Brulard, p. p. H. Martineau (*ibid.*, 1961)

Vanina Vanini, Romans et Nouvelles, p. p. H. Martineau

(*Bibliothèque de la Pléiade*, 1952)

などを参照する。

女主人公たちの会話が出発点なのであるから、Julien や Fabrice を語るのではなく、Mathilde, M^{me} de Rênal, (時に duchesse de Sanseverina, Clélia) などを、それぞれの会話の面からまず検討してゆくことになる。

方法は、最初「赤と黒」⁽³⁾の2人の女主人公について、会話がどこに、どれだけの量で存在するかを見、発信の内容、受信者、発話に伴う状況（発信時の発話者についての「ことば」以外の *signe*, 意識内の描写と「ことば」との関係）を検討し、その意味を探る、という第一段階の調査を経て、そこからいくつかの着目をひき出すことにする。これらの着目すべき点のうち、発話者が女性であることをもとにした検討を、まず、社会的背景に関連させつつ、行ってみる。

（附 このなかで問題が残るのは、会話の量の調べ方である。語数を数えるという煩雑な手段をとっても、結果はさほど変わらないという類推から、行数を以てこれにかえた。これは *La parole des personnages dans les Flanbert* の著者⁽⁴⁾ がとった方法である。それで細かな差異が結果に影響するとは思われない。

第1章, 1

先回、「感情教育」における会話の用い方の中で、女性の社会での位置を反映するものとして、注目をひいたのは、彼女たちの言葉が、それを待ち望む男性に、なかなか与えられないという現象であった。M^{me} Arnoux が Frédéric の前に姿を現わしてから、最初のひと言まで1頁半⁽⁵⁾、次のひと言「あゝ、よく覚えておりますわ、この方」⁽⁶⁾までは、50頁、半年以上の歳月が流れる。(拙論、《Parole》の表現法⁽¹⁾)。このことは、他の女性についても同様で、その言葉は男性の主人公に、恩恵のように、戦利品のように与えられていた。「ボヴァリー夫人」に関しては、男性の側の恋の始まりは常に見るという行為で始まり、女性の言葉は、親密さへの一歩として与えられている。(女性の恋の始まりが言葉であることと共に、この作品の検討は次の機会にゆずる)

調査の対象が、フロベールに限られていたので、断定することはできないが、女性の言葉のこのような捉え方は、研究範囲を拡げるに従って確かなものになると思われる。

さて今回、「赤と黒」について作成した表についても、同じ現象を指摘することができる。例えば、マチルドの発話のうち、始めてジュリアンが受信者となるのは、出会いから、実に38頁も後である。La mole 邸で初めて出会った時に会話がないのは当然としても、ジュリアンの職場である図書室に偶然この令嬢が入って来た時も会話はなく、兄の伴をして落馬したジュリアンの面白い話をマチルドがきゝたがる場面でも、マチルドは、質問を兄に向かって発し、三人で笑うという描写になっている。しかもこのマチルドの言葉は、直接話法になっていない。

M^{lle} Mathilde faisait des questions à son frère sur les détails... Julien rencontre ses yeux plusieurs fois, il osa répondre directement, quoi qu'il ne fût pas interrogé (p.247)

更に何日か経過して、Julien に共感を覚え初めてやっと、“(Mathilde

eut la bonté de lui adresser la parole” (p.253) という描写がある。ここでもやはりマチルドの直接話法はない。彼女の言葉が、直接話法で小説に登場するのは、p. 254 であるが、ジュリアンにさし向けられたものではなく、Molière 劇「人間嫌い」の Célimène そのままに、サロンの客を痛烈に批判する言葉である。ジュリアンは、それらの言葉を、「理解はできるが、自分には話せぬ外国語のように」(p. 254) きいているのみである。

これらの signe は、ジュリアンとマチルドを距てる社会的身分の違いの大きさを明らかに映し出し、徐々に、相手の「ことば」を獲得してゆく過程が、その心を獲得してゆく過程と重なることを如実に示してゆく。先に「感情教育」で注目されたこの事実が、ここでは、2人の恋人を距てる距離が大きいだけ、一そうはっきりと拡大されて現われているのである。当時の若い女性は、むやみに男性に話しかけることはなく、女性から「ことば」を与えられるということは、1つの faveur であったのである。

別な観点から、マチルドの「ことば」を検討すると、むしろ非常な積極性と率直さが見られるので⁷⁾、このような女主人公にも、社会的制約がきちんとあてはめられているのに驚くほどである。まして、パルムの僧院の Clélia Conti が姿を現わしてからずっと会話なしに過ぎてゆくのは当然かも知れない。なお作者は、彼女が、ファブリスに2度も会い乍ら言葉をかけなかったことを、彼女自身の反省という形で強調している⁸⁾。このことは、第2章3の附。「沈黙の意味」のところで述べることにしたい。

以上の図式は、若い女性にあてはまるだけではない。「パルムの僧院」のサンセヴェリーナ公爵夫人も、ファブリスに対する直接話法は、彼が成人して戦場に出かける時まで1度もない。マチルドの母夫人などは、ジュリアンに話しかけさえしない。かたじけなくも、ジュリアンを「見て下さった」 daigna regarder (p. 245) だけである。

こうした図式のなかにおくと、レナール夫人とジュリアンの最初の出会いが、夫人の直接話法で始まるのは、全く特異なことであるのが明らかに

なる。ジュリアンの泣き顔と姿から、少女の変装かと錯覚した位で、《mon enfant》(p. 26) と声をかけたことになっている。このような出発点なしに、レナール夫人が男性に親近感を抱くことはあり得ないし、またこの特異さは、一般的な図式を背景にして始めて意味を持つ設定であると言える。

以上のように、社会における女性の発言に関する制約は、フロベールについて言えることが、スタンダールについても言い得たことになるが、これらの女性たちの発言は、スタンダールの好んだ性格描写という面には、何らかの寄与をなし得ただろうか。次項では、その点を検討してみたい。

第1章, 2

さし当って、「赤と黒」の2人の女主人公、レナール夫人とマチルドは、性格の全く異なる女性として描かれていることを思い出そう。描写部分の文からそれを証明するのは容易であるのは言うまでもない。主人公のジュリアン自身が、ことある毎に2人の女性を比較し、それがまた、この小説の魅力ともなっている。しかし、2人の女性の、「ことば」そのものに、作者がそれほど大きな差違をつくり出しているかどうか？ ことごとに対照的に扱っているかどうか？ という点になると疑問が残る。この点を細かく検討してみたいと考える。

先ず「ことば」の量の検討からはじめよう。全体として、女主人公たちの直接話法が、多くないことを指摘する必要があるだろう。最初に述べた方法で計算した場合、レナール夫人の会話は46ヶ所、マチルドは41ヶ所である。会話が次々と続いて行っても、それは1場面として数えるのだが、実を云うと、スタンダールの小説は、「赤と黒」でも「パルムの僧院」でも会話が延々と続く場面は非常に少い。レナール夫人に関して云えば、パリへ出るジュリアンが夫人の部屋で過ごす所の合計91行の「ことば」と、死刑の前のやりとり48行が際立っているが、後は夫を欺くための52行+43行を除けば、殆んどが、1場面、2行から10行(合計数)といった短かさ

である。マチルドはもっと少く、初めてジュリアンが部屋に忍んで来る場面の合計27行をこすものはない。量については、どちらの女主人公も少ないという結果になる。

では、会話の「ことば」を取巻く解説はどうか？ まず作者が、かなり初歩的な方法で、2人の女性の違いを強調していることは、認めなければならない。即ち、内気なレナール夫人の「ことば」は、「ふるえながら (tremblant) とか「ふるえる声で」(d'une voix tremblante)とかいった標識に伴われていることが多い。ざっとあげてみても、《timidement》(p. 9), 《timidement》(p. 12), 《une voix douce》(p. 26), 《ce ton si doux》(p. 28), 《avec un accent et une grâce dont Julien sentit tout le charme…》(p. 29), 《sans le regarder》(p. 38), 《tremblante》(p. 39), 《d'une voix tremblante》(p. 77) といった調子である。これに対してマチルドの会話は、《avec cette voix vive, brève, et qui n'a rien de féminin, qu'emploient les jeunes femmes de la haute classe》(p. 281) と紹介されており、屢々《avec un accent de folie plus que de la tendresse》(p. 340) とか、《dépouillé du ton de la tendresse》(p. 340), 《d'un grand sang froid》(p.339), 《cette vive et indiscrete interrogation》(p.298) などと、描写されており、烈しい気性を示している。

内容についても作者は一応の工夫はしており、マチルドの場合は命令的なものが多く、特に父の怒を買ったジュリアンに、「fuis。」(p. 437) という言葉を発して相手の心を傷けたり、「il faut」(p. 321) という命令調で、彼に嫌がられている。作者は、Louis XV まで持ち出してこの語の与える調子を強調し、またどちらの場合もイタリックにしている。レナール夫人については、逆に「Mes fils font des progrès… si étonnants…」(p.38) とおづおづした調子を表現するなど、努力が認められる。しかし、こうした地の文や内容についての配慮は、どの作家にも見られる当然の工夫であって、特に直接話法を用いて、性格や雰囲気をかもし出そうとした証明には

ならない。この点がフロベールと大いに異るところである⁹⁾。

そこで、会話に密接な1つの図式を用いて、その観点から、2人の女性の「ことば」のあり方を検討してみたいと考える。ここで用いるのは、第一発話の原理——話しかけの図式——というべきものである。現実の生活で、内気な女性といえ、怖らくその人の会話は、積極的に口火を切って第一発話を行うというのではなく、相手に答えることで終止する筈である。この小説に関しても、2人の女性が何回最初に口を切っているかを調べてみれば、何らかの結果が得られるものと考えられる。さて、数に現われた結果は、マチルドの場合、その会話41ヶ所のうち、相手に答えているのは、5回のみであり、大変少い。これは、彼女の積極的、命令的性格から当然と言えよう。ところが、レナール夫人も、46ヶ所中、答えの部分は12回となっており、内気な性格という描写から想像できるほどには多くなく、残りは夫人の方からの発話なのである。これはやや意外な結果であった。その理由の第一に考えられるのは、作者が、会話を演劇のようなやりとりに書かなかったことにも関連はあるだろう。つまり女性の作中人物に限らず、会話は第一発話が多く、その答えの記載がないのである。第一発話そのものも長くなることは稀で、作者は時として《～etc.》と省略してしまう。答の量は必然的に少くなる、と言える。しかし、そのことを考慮に入れても、レナール夫人が、かなり積極的に発言する人物であることに変わりはない。作者が解説文で気を配って「timidement」と描写しているにも拘らず、彼女の発言は時に命令調にもなり得る。「Soyez prudent」(p. 83)と命ずることもあるし、レナール氏を怖れるジュリアンを「Quoi! pas meme du courage-」(p. 135)と叱咤する場面さえある。会話に関する限り、この2人の女性は、作者の他の描写ほどには対照的でなく、同じ語族?に属すると言える。このことは、最後の章でもっと明らかにできると思うが、この章で採択した「話しかけ」の観点だけでも、それが着目されることを指摘しておきたい。

第1章, 3

さてこうして、女主人公たちの、直接話法による会話は、女性の社会的制約を反映しており、また意外にも、2人の作中人物の個性の類似点を表現していることが明らかになったが、では、女性自身にとって、会話はどのような意味を持っているのだろうか？彼女たちにとって最も重要な恋愛と会話の関係はどうであろうか？第1章の3ではこの点を中心に見てゆきたいと考える。まず注目されるのは、女性にとって、男性との親密な会話が、恋の進行過程に正比例しているという事実である。はじめは直接に言葉を交わすこともなかったマチルドは、ジュリアンと毎日庭を散歩するようになり、その会話によってどんどん恋心を成長させてゆく (p. 303 など)。レナール夫人も同様で、ジュリアンとの間に、蝶をなかだちとして話題が生じる。ジュリアンは、沈黙の時間の怖い苦痛にさらされずにすむようになり、「2人はたえず喋り続けた。いつもたわいないことについてだが、熱中して」(p. 49) となっている。自ら話し、それに答えてもらう、ということが、彼女たちにとって恋の大きな魅力の1つなのである。逆に、答えがないというのは、このような親愛の情の拒否としての指標を持つ。この図式が一そうはっきりと証明されるような例として、舞踏会の場面をあげてみよう。他の人をおいてジュリアンに話しかけるマチルドを見て、周囲の人々が、舞踊会の女王から「かくも強く返事を求められている幸運な男は誰なのかとふり返る」(p. 284) という描写がある。小説の終りの牢内の描写で、恋の存在しないジュリアンとマチルドの間に会話は消滅し、レナール夫人との間に至福の会話が蘇えるのもこの図式の証明になるだろう。女性にとって、男性の姿からよりも、心を打ちあけられる会話が心を魅くというこの図式は、既にフロベールの作品では、意識的に用いられたことである。平板な、夫との会話に飽き果てたボヴァリー夫人は、レオンとの初対面で、音楽や小説の話に心を奪われる。レオンの方が心を魅かれるのは先ず夫人の姿であるのと対照的であり、蜿々3頁も続くこの会話と、

用いられた言葉の選択は、フロベールがこの図式に充分意識的であったことを示していた⁽¹⁰⁾。スタンダールもまた、この女性心理に無知ではなかったと言えよう。ただ、ここで重要な指摘を一つ加えておかねばならない。スタンダールの場合、この恋のはじめの大切なおしゃべりは、全部を直接話法にしたフロベールと違い、マチルドについても、レナール夫人についても、一言も直接話法になっていないことである。理由は後に推察することとし、ここでは、指摘にとどめておく。

附 沈黙の意味

さて、女主人公に関しての会話の持つ意味は、この小説についても、明らかになって来たが、曾て⁽¹¹⁾、ラファイエット夫人や、マルグリット・デュラスの小説に見出されたような、沈黙による表現法は、この小説ではどう扱われているだろうか？言われた言葉よりも、言われなかった言葉の方が、より多くの表現機能を果すクレヴの奥方のような公式は、スタンダールの女主人公に見られるだろうか？この点に関しては、スタンダールは、女流作家よりも、この公式の魅力に、うとかったようである。スタンダールの人物たちは、言葉の表現していないものを信じることはできない。ジュリアンは、レナール夫人の手紙の言葉に裏切りだけを見て復讐に突進する。また最後に2人が牢内で過す至福の時は、沈黙に包まれてはいない。彼の小説に於いて、沈黙は凡て、会話の欠如、会話の公式のネガとして扱われているのみである。例えば、クレリア・コンチが、フェブリスに出会った時の沈黙を、彼女自身が後悔して、「あの方は、自分が囚人で、私は司令官の娘だから、挨拶に答えなかったと思われるだろう」(p. 282)と悲しむ。ここでは沈黙は、乙女らしい羞らいの描写であるが、それ以上に、「女性のことばは親密の贈りもの」という図式のネガを示しているのである。また「赤と黒」で、レナール夫人が、子供の病気によってジュリアンとの恋を後悔し、一切言葉を交わさなくなる場面がある⁽¹²⁾。これも同じ公式のネガとして考えることができるだろう。

以上、女主人公の言葉の持つ意味を、明らかにし、女性の言葉に関して、与える場合にも、受け取る場合にも、社会的背景と密接に関わる図式を見出した。その意味では、女性の会話は、やはりこの小説でも重要な役割を果たしていると言えるだろうが、次章では、逆に、その限界を決定する操作にとりかゝりたいと考える。

第2章, 1

人物の会話に、無限の可能性を見出し、会話の力を最高度に活かした文学が劇作だとすれば、この会話の力の限定こそ、小説のアイディンティティをなすものだと言うこともできるだろう。第1章で、女性の会話の社会的意味を、かなり理解していたように見えるこの作家が、小説家として、どこにその限界をおいているか、をこれから検討してゆきたいと思う。そこで、この章では、「ことば」の力のネガティブな面を、列挙してゆくことになるが、作家が、一般に人間の会話に対して抱いている不信と、技法としての会話に抱いている不信とを区別しなければならないだろう。しかしこの2つの不信が、同じ結果を生み出すこともあり、スタンダールの小説における2つの不信の交錯は、興味深い問題である。

先ず、ここでも、第1章であげたように、女主人公の会話部分が少いという一つの結果が、手がかりになるであろう。

「赤と黒」の作者が、会話によるコミュニケーションに不信の念を表明し、会話が内心を率直に伝達しないという認識を持っていたことは、容易に証明できることである。1の22章の詞章「La parole a été donnée a l'homme pour cacher sa pensée」(p. 137)はそれを単的に現わしたもののだが、実際この小説の作中人物は、しばしばこの原則を裏書きするような行動をする。特に主人公ジュリアンが、マチルドに対して、思わず迸る愛の言葉を隠して、わざと冷い返事しかしない場面は、多分この小説の魅力の一つであろう°(Livre II, chap. XXVIII-XXXII) こゝだけでなく、ジュリアンは、常に自分の自然な感情を抑え、自ら計算した戦略に従って言

葉を扱ふ。作者はこのように、作中人物が自らの言葉を支配し、偽りの伝達を受けた相手の心理を読みとり、また次の言葉を扱ひ出すといった場面の描写に力を入れているように見える。極端な例を引くと、あの純真なレナール夫人の直接話法のなかで、最も行数の多いのは、彼女が夫を欺き、夫の心理を操って、自分の思い通りに動かす場面なのである (p. 130-31, 52行。p. 132-33, 43 行)。人間の言葉は、通常その本心を現わさない、という認識は、深くこの作家を浸していたようである。このような認識は、フランス文学では、何処にも見られる、ありふれたものであるが、スタンダールの場合、この基本的な「ことば」観が、直接話法の少なさに直結する結果になっていることに注目したい。何故なら人物の発話と内心のずれを肯定し、それを読者に伝えるためには、小説表現のレベルでは、作者の解説文を増し、また直接話法以外の記号によって、人物の内心の情報を補うことが必要になるからである。事実、これから見てゆくように、この小説の直接話法はそれよりずっと多量の心理の解説や、その現われである記号に伴われている。スタンダールの心理解説は有名でもあり、研究も多いので、省略し、ここでは、内心を表現する記号が、どのように人物の言葉を補う標識になっているかを見ておこう。

会話が発信者の内心の動きを伝えないものだとすると、人間はお互いに不信の模索の中で、言葉の現わしていない真実を探り出し、信じられるものに到達しなければならない。作中人物は互いにその標識を手がかりに相手の言葉の裏を解釈するであろうし、この標識は同時に作者が読者に送信する記号ともなるわけである。「クレーヴの奥方」の場合、その云われなかった真実の確証を与えるものの証号の1つとして、心の乱れを示す顔の「rougeur」や、リボンの色といったものがあつたが、「赤と黒」についても、会話のまわりにおかれた標識を引き出し、枚挙してみると、作者の特に好んだ記号と云えるものが浮かび上ってくる。すなわち、この小説の作中人物たちは、相手の言葉を疑いつつ、その真意の確証を目に求めてい

る。ジュリアンは、「讃歎が真物であることを証明する、喜びに輝く眼」(p. 294)によって、マチルドの会話を信じる。ジュリアンが初めてマチルドに出会った時も、目に注目し、それが表現している倦怠を察知し、レナール夫人の眼と比較している(p. 243)。マチルドもまた目という指標を頼りにしている。「彼がどんな答をするか見たいものだわ。でも彼の目が輝いている時に言いましょう。その時は嘘が言えないのだから」(p. 312)⁽¹³⁾。逆に熱気の不在も目によって示される。舞踏会の場面で、マチルドは目だけで、ジュリアンに無視されていることを読みとり、「ひどく傷つく」(p. 294)。更にレナール夫人が、夫の重々しい会話をききながら、目は3人の子供の動きを追っている描写(p. 9)は、この夫妻の愛のあり方をうまく現わしているところである。

スタンダールは、目という標識を補って、人物の会話では伝達できない真の意識を説明したのであり、それは逆に会話部分に対する作者の信頼がそれだけ薄かったことを示していると言えるだろう。以上は、この作家が会話の誠実性に対して抱いた不信が、同時にその部分の縮少という結果を招いた場合をとりあげたのであるが、更に、彼が一般的会話不信よりも、技法としての直接話法を余り重視していなかった点に注目し、証明してみよう。

その第1は、直接話法の持つ文体効果についての無頓着である。彼以外の作家、例えばフロベールの作品を調べていて気がつくのは、間接話法から自由間接話法へと、徐々に意識性と音響性が、高められ、そして直接話法が、その最も強度な、*illustration*として、その効果を充分発揮させられているということである。このような、文体効果の図式は、「赤と黒」では、どんな形でも見出すことは出来なかった。直接話法とその前の描写とを取りあげてみても、意識内の描写があってその同じ内容の繰返しとして、口に出した会話が存在する場合は、レナール夫人4回、マチルド4回と極度に少く、またその場合でも、*illustration*として文体効果をあげていると

はとても言えない。例えば、「M^{me} de Rênal s'attendait qu'il fallait annoncer qu'il quittait la maison ou y restait./—*Quittez vous vos élèves pour vous placer ailleurs?* (p. 77) といった具合である⁽¹⁴⁾。

第2には、そればかりか、直接話法そのものによって、発話した人物を表現することも余りやっていないことである。直接話法の「ことば」そのものが、人物の性格を現わすという工夫は滅多に見られない。それが行われている数少ない例は、マチルドであって彼女は、従妹に向ってずけずけと求婚者たちを酷評する。確かに女らしくない露骨な言い方は、この「ことば」だけで充分感じられるのに、この場合でも作者は、すぐ次のような説明をつけ加える。「ごらんのように、マチルドの活達な、きっぱりした、鮮かなものの見方は、彼女の言葉を台なしにしていた。彼女の言うことは、女らしい繊細さには何か一寸強烈すぎるところがあると……」。(p. 308) と解説されてしまう。作者は、直説話法だけでは、この感じを伝え得ないと危惧したのである。この小説の直接話法は、皆こうした作者の予防措置（蛇足？）にとり囲まれている。レナール夫人の「ことば」が、声の調子、態度の描写に伴われていることは前に指摘したが、実際作者の危惧した通り、この夫人の「ことば」は、「おずおずと」といった解説でもない限り、少しもおずおずしていないことが多いのである。例えば、新聞の悪口を言う夫に対して、おずおずと夫人の返すことばは、まことに理屈っぽい。「でもあなた、その新聞は読んでいらしたことがないじゃないありませんか？」とやりこめている (p. 9)。「赤と黒」の作者は、直接話法部分が、それだけで作中人物の性格を表現できるとは考えておらず、また事実表現できていないことが多いと結論せざるを得ない。

更にスタンダールが、直接話法の機能を、あまり信用していなかった証明を、2つつけ加えよう。その1つは、作中人物の会話について描写しながら、その会話を1度さえも直接話法で具体的に示そうとしなかったことである。恋する女にとって、恋人との間に交される会話が、いかに楽しい

ものとして描かれているか、を先に指摘したが、2人の女主人公のうちレナール夫人については、その場面に直接話法は1度も出て来ない。マチルドが屢々庭を散策しながらジュリアンと長い会話の時を持つ場面では、豊富な話題や、心の変化の解説に4頁以上も費しながら、直接話法は2人の総計でたったの3言である (p. 302~6)。また人物の会話の様子について詳しい描写をしながら、その実例を示そうとしない。例えば、パリに馴れて来たジュリアンについて、「sa taille, sa tournure n'avaient plus rien de provincial, il n'en était pas ainsi de sa conversation: on y remarquait encore trop de sérieux, trop de positif. Malgré ces qualités raisonnables, grâce a son orgueil elle n'avait rien de subalterne」(p. 280) と、その会話の特徴を特に重視しながら、一言でそれを浮き出させるような直接話法はどこにも見当たらない。

もう1つの証明は、読者として、最も面白い会話が期待されるところを、作者は他の手段で切り抜けている点である。例えば、ジュリアンとの恋に怒るラ・モール伯と娘の間の、長い曲折のある交渉。徐々に父が譲歩し、成功に至る寸前、レナール夫人の中傷によって一転破局へ向かう緊迫したやりとりなのだが、この父娘は、同じ家に住みながら、この駆引きを会話でなく、手紙ですすめてゆく。この手紙の面白さは無類であり、若きスタンダールが、*Liaisons dangereuses* に見た至宝の技法だったとも思われるが、作者は会話よりも、手紙の魅力に自信があったと考えるべきだろう。マチルドが、ジュリアンに、同じ屋根の下にいながら送ってよこす手紙の面白さについては、Genette が *Figure II 《Stendhal》*⁽¹⁵⁾ において、夙に指摘している (p. 163 sqq) が、この人もまたそこに Laclos の影響を見ているのは興味深い。(ibid. p. 163)

以上のようにスタンダールは、会話による *communication directe* が、人の心をそのまま伝えることを容易には信じず、その結果として解説や記号による補足が多くなり、また技法上も直接話法の利用が少いことは、明

らかになったと思われる。

第3章

以上、人間のことはそのものに対する不信と、技法上の不信が、「赤と黒」に見え隠れするのが窺われたが、しかしあれほどサロンでの会話を愛したスタンダールが、言葉の2重性の認識⁽¹⁶⁾はともに角、会話の技法上の利点を、作品中に数多く用いようとしなかったのは、何故だろうか。第2章の結論によって、その事実は勿論認定した上で、それでもなお直接話法が用いられている部分を検討してみることで、スタンダールがこの話法をどんな風に考えていたかが更に詳しくなるものと思われる。つまり、この作品における直接話法の限界は確認した上で、そうした限界がおかれた理由を考察し、1つ1つ留保をつける形になるかも知れない。また女主人公に直接話法が少ない理由も考えてみたいと思う。

第一に留保すべきことは、この小説で、女主人公の直接話法は少ないが、女性の関わらない場面では、直接話法はかなり駆使されているということである。Retz家の舞踊会での, comte d'Altamira とジュリアンの政治論議は、たっぷりと長い直接話法であるし、(Livre II, chap. IX), ストラスブルで、恋の手ほどきを受ける Korasoff とのコミックな会話は、4頁程も続いて、(p. 392-395) この種のサロン風会話における作家の手腕をうかがわせる。そこで第2章の結論について、次のような但し書きをつけることができるだろう。

スタンダールの小説を、女主人公中心に見ていった場合、直接話法に大きな重点がおかれていないのは、当時の社会的状況からいって、女性の会話が読者をひきつけたり、小説の中の世界で、物語を自然に展開させることがあり得なかったことも、一因である、と。17世紀の小説が、サロンでの女性の、蜿々たる会話の形式で始まり、また終ったのは、スタンダールの時代では、全く異様な、現実ばなれの様子を呈したに違いない。おそらく女性は、主として花のように眺められ、小鳥のように、意味のないことを囁

るものとされていただろうから。この推測を、私たちは、舞踏会でのマチルドの発話の場面で、裏付けることができると思う。互いの話に熱中しているアルタミラ伯爵とジュリアンの間に、慎しみを忘れてマチルドが割込む。「——Rien de plus vtai, dit M^{lle} de La Mole./Altamira la regarda étonné」(p. 293)。そして彼女の態度の異様さは何度も強調されている。

以上のことは、しかし乍ら、逆に彼の小説で、女性の直接話法が用いられた場合の重要性を考察するきっかけを与える。数は少いが女主人公たちは、どんな時に発話し、その発話は、どんな風に扱われているだろうか。

はじめの手がかりに、パルムの僧院の、サンセヴェリーナ公爵夫人を思い出そう。彼女は、愛する甥のファブリスと共に、兄の城で年月を過ごし、舟遊びをしたり、彼の少年時代の憧れの人となるが、この間、直接話法による会話は1度もない。彼女がはじめて甥に、直接話法でものを言うのは、彼がナポレオンのために、戦に赴く時、すなわち別れの時、なのである。

「赤と黒」のレナール夫人も、他の場面をひき離す長い会話は、ジュリアンがパリに行く別れの日(合計91行)と、死刑を前にした牢獄でのジュリアンとの至福の日々のそれ(48行)である。スタンダールが、女性の主人公に、かなりの直接話法を許すのは、恋人との別れという大事件を前にした時なのである。女性が、社会的制約を投げ捨て、自分の感情をそのままに表現する時、その心を高く響かせる方法として作者は直接話法を用いたことができる。このことを、今まで様々に検討し、結論した「ことば」への不信という限界の上にとって、推量してみよう。たしかに、原則として、「ことば」は、社会の約束ごとに縛られた表面だけのものであり、真の心を隠す働きの方が多いが、時には人は、情熱の迸るままに、制約をこえ、自分の真の感情を相手に伝えようとして話す。例えば、恋する人の前では、恋人の心を得るための戦術よりも、真実が優先する場合があります、それは、別れを前にした恋する女性の「ことば」となった時、典型的に現われるともいえる。社交言語に対して、情熱言語といってもよいかも知れ

ない。そして作者は、女性がこの情熱言語を話す筈の場面では、技法上の不信にも拘らず、直説話法を用いることをためらわなかったと考えられる。

このことが、最もよく現われているのは、「赤と黒」のマチルドの場合であろう。彼女は、社交用の態度と、自分に誠実な態度とを巧みに使いわけ少女として登場するし、ジュリアンも屢々それに注目している。

「Ses (de Mathilde) opinions dans le jardin étaient bien différentes de celles qu'elle avouait au salon. Quelquefois elle avait avec lui un enthousiasme et une franchise qui formaient un contraste parfait avec sa manière d'être ordinaire, si altière et si froide (p. 303)」⁽¹⁷⁾。ところが、マチルドの直接話法は、その心を直截に表明している場合に常に用いられる。つまり彼女の「ことば」は、いつも、きっぱりと嘘のない言い方で、成立っているのである。作者が女らしさに欠けるとわざわざつけ加えている箇所を引用しておこう。彼女は従妹に、自分の求婚者たちのことを、「彼等は私と結婚したがっているわ。いい取引だもの。私はお金持だし、お父様は婿を出世させるでしょうから。あーあ、せめて一寸面白いのを見つけてくれればいいけど」(p. 308)と露骨に話す。あの慎ましいレナール夫人も、ジュリアンに対する「ことば」は、常に情熱言語である。しばらく自分の許を去るジュリアンに、夜の密会を言い出し、彼がためらうのを見て、「Quoi, pas meme du courage!」と「貴族の娘の高慢さをすっかり出して」(p. 135)叱咤する。ここではこのように、「ことば」につけ加えられた解説も、マチルドと殆んど違いがなくなってしまう。そしてまたこのような場合の「ことば」については、クレリアコンチも、サンセヴェリーナ公爵夫人も、ヴァニナ・ヴァニニも、凡ての女主人公が、ただ一つの点に一致してしまうのである。それは、情熱のための勇氣という点であり、彼女たちの直接話法は、結局常に1つの型に集約されているといえるのである。今まで、女主人公の直接話法という視点で作品を見て来たが、私は特にこの点に注目したいと思う。スタンダールの女主人公たちは、作

者が、人間として最も高く評価し⁽¹⁸⁾、理想とし、愛した情熱の女性であり、真実の感情がそのまま、言語活動という行動にあらわれる人物だったということである。直接話法による発話を焦点にしてみると、この点で、レナール夫人もマチルドも、その他の女主人公と共に、同一語族に属するというのは、面白いことである。

註 の 部

- (1) 拙論「《Parole》の表現法—*L'Education sentimentale*を中心に。」大阪外大学報47号 1980。
- (2) 直接話法で表現された言葉を「ことば」と表わすことにする。便宜上拙論ではいつも用いている符号である。
- (3) 固有名詞は最初の1回のみ原語で、記し、後は日本語に訳して用いる。
- (4) Cl. Gothot-Mersch *De «Madame Bovary» à «Bouvard et Pécuchet»: la parole des personnages dans les romans de Flaubert (Revue d'Histoire Littéraire de la France 1981, No. 415, p. 542, Note, 4)*
- (5) G. Flaubert *L'Education sentimentale* p. p; R. Dumesnil, société des belles Lettres. t. I, p. 9.
- (6) *ibid.* t. I, p. 59.
- (7) 本論第3章, p. 41.
- (8) *op. cit.* p. 282.
- (9) *op. cit.* 「《parole》の表現法—*L'Education sentimentale*を中心に」
- (10) Flaubert, *Mme Bovary*, P. P. Gothot-Mersch (*Classiques Garnier* 1971) p. 82-86.
- (11) *Mme de Lafayette* については「《Parole》の表現法—クレヴの奥方を中心に—」大阪外大学報52号, 1981。
Marguerite Duras については「非伝達の言語—《夏の夜の10時半から》—」*études françaises* 15号, 1977.
- (12) 《Elle ne sortait point d'un silence farouche》(p. 112).
- (13) 例をあげるときりがないが、《(Julien) se cachant tant bien que mal les yeux avec la main》と目をかくして本心を見破られない用心をする場面 (p.424) などもある。
- (14) 他には p. 83, 97, 113, 281, 308, 419, 436. 但、いずれも、直接話法の前に、女主人公の内心が描かれているというだけで、*illustration* の効果はない。
- (15) Gérard Genette, *Figure II* Col Points, Seuil. 1969.

- (16) この点については、Michel Crouzet, *Stendhal et le langage*, bibliothèque des Idées, n. r. f 1981 に詳しい。
- (17) affectation に対する作者の嫌悪については、Georges Blin *Stendhal et les problèmes de la personnalité*, (t. I. p. 323sqq) Corti 1958.
- (18) このことは広く言われていることで引用するまでもないが R. Bolster, *Stendhal, Balzac et le femisisme romantique* Minard 1970, p. 81 など。